
あの日の透析

(林 大助、VIVID No.76, p.1-6, 2016)

2016 年 10 月 21 日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

本レポートは 2011 年 3 月 11 日東日本大震災の現場に駆け付けた 3 人のジェイ・エム・エス（医療機器、医薬品の製造・販売及び輸出並びに輸入を行っている会社。本社は広島）社員の記憶をもとに作られた体験談を掲載した記事である「あの日の透析」をもとに作成・要約する。

1 人目は仙台営業所勤務の林さんである。林さんは地震が起きたとき東京の出張先にいた。子妻や仙台営業所の業務員の安否がわからないまま 3 月 11 日は東京のホテルにて宿泊をする。翌日（3 月 12 日）、車にて仙台に戻る。その時の仙台は電気がすべてダウンして街に明かりのない状態で普段は見ることができないきれいな天の川が見える程度であった。その翌日（3 月 13 日）仙台営業所の通信は普及し、医療機器の供給を広島本社に頼む。医療機器が広島本社より来るようになったのは 3 月 15 日以降で被災から 4 日経過した後である。

林さんは、東日本大震災の危機管理について以下のように述べている。「大津波警報の時、以前から調べていた明治三陸地震の再来かもしれないと思いました。実は、震災の 2 日前の昼頃にかなり大きな地震があり、前震だったといわれています。あの時に皆が明治三陸地震の歴史を学び、予備知識を得ていたら…、10m を超える大津波が再び来るかもしれないという認識があったら…もっと多くの方々が助かったかもしれせん。」この供述は、危機管理能力や地震に対する予備知識の重要性を教えてくれていると考える。

2 人目は同じ仙台営業所勤務の工藤さんである。工藤さんは震災時に病院が透析体制をどのように維持したのかを述べている。彼は地震の直後、一番近い宮城県災害対策ネットワークの拠点病院に向かう。到着時の病院の様子はすべての電気が消え、スタッフは「何もできないから患者さんはすべて帰したよ。」という状態であった。その病院以外にも地震により各地の病院は大きな損害を被っていた。工藤さんは HD が可能な緊急病院に患者さんが集中すると考え、そのような拠点病院に必要な物品を供給するのに四方八方手を尽くした。震災当時、HD が可能な病院は全員が透析を回せるように通常の 4 時間の時間を短縮して、24 時間稼働させて対応をしていた。病院は約 1 週間その緊急対応が続ける必要があった。一方 CAPD（腹膜透析）は震災時にはその長所を生かす結果になった。CAPD は各家庭で透析液のストックを置いているので、家が倒壊して透析液がなくならない限り変わらず治療ができる。APD の患者さんも全員、緊急時に

CAPD をする教育・訓練を受けていたので、治療が各自で続行できていた。HD は水と電気がないとできないが、CAPD は震災時に強い医療であると考ええる。

3 人目は東京勤務の末田さんである。末田さんは透析液が不足している被災地に透析液を届ける時の様子を述べている。末田さんが透析液を届けようと思いついたのは地震 2 日後の 3 月 13 日である。福島地区の担当者より、透析液の供給を要求されたからである。透析液も医療品で処方箋がないと普段は出すことができないが、この時は末田さんの判断で処方箋なしで透析液を用意する。CAPD の透析液の届け方は特殊で、広島・越谷どちらかの倉庫より直接宅配便で届けるようになっているが、震災当時は宅配システムがストップしていたので末田さんが自身の車で越谷まで行き、被災地まで届けている。このケースは末田さん独自の決断により行った行動で透析液を必要としている人を多く助けられたと考えられる。

以上の 3 つの体験談からは多くのことを学ぶ事ができる。まず、1 つ目の体験談からは個人個人の震災に対する予備知識を普段から蓄えておくことで、震災により与えられる影響を減少させることができるのではないかとということが考えられる。2 つ目、3 つ目は震災時における透析の話である。HD に関しては病院が機能していないと透析できない。故に、震災時病院が大きな損害を被っていたら透析することができなくなる。それに対して、CAPD は透析液さえあれば自身の取り換えにより透析を継続させることが可能ということが述べられていた。携帯可能な医療が災害時に非常に役に立つということが今回の体験談で分かった。そして、3 つ目の体験談にてその CAPD も透析液がないと機能しないので、被災地に迅速に透析液の供給が必要だということが述べられていた。今回は 1 人の社員が自力で透析液を届けられないといけないほど、被災地の医療品不足が語られていた。また、自身の判断で透析液を届けるという個人の、その現状を把握して下した判断によって救われる命があったことから震災が起こった際は自身の判断能力が非常に求められると考えた。